

にぎやかに ご神体守る



上白金地区にある白山神社のご神体を民家に移す伝統行事「跳ね込みまつり」がありました。江戸時代に長良川の氾濫の際、人々が濁流の中ご神体を運び、守ったことが起源とされています。ご神体が神社を出発すると、そろいの法被を着た「山上がり」と

呼ばれる男衆が、太鼓とかねを打ち鳴らし、選ばれた御神房家まで練り歩きました。地元住民が見守る中、ご神体に移されると、山上がり交替で祭壇の前へ上がり、体を大きく揺らしながら太鼓とかねをにぎやかに打ち鳴らして、地区の平穏を願いました。

あんな事、こんな事

関市イメージキャラクター
「関*はもみん」



明かりをともし先祖供養

ろうそくに火をともし先祖供養や無病息災、家内安全を願う「千灯供養」が下之保の高澤観音で開かれました。参加者は般若心経とともに願い事や名前を紙に書いてろうそくに巻き、火をともし並べていきました。600本を並べ終わると卍型にゆらめく炎が高台から見られる予定でしたが、雨により残念ながら途中で中止に。家族の健康を願ってまた来年も参加したいと皆、笑顔を見せていました。

剣士熱戦繰り広げる

夏恒例の「わかくさ高校剣道錬成大会」が市総合体育館で行われ、県内外から1,000人以上の高校生剣士が集まりました。3年生が引退し、1・2年生が中心となって始動するこの時期に、より多くの試合を経験し、全国の生徒と交流を深めようと毎年開催されています。会場では、剣士の気合いの入った声や競り合う竹刀の音が響きわたり、心と技術の鍛錬に励んでいました。



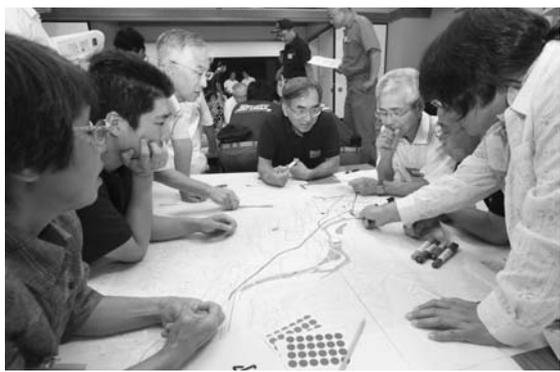


私だけの宝物箱

刃物の正しい使い方やものづくりの面白さを知ってもらい、県内産の間伐材を使って親子で一緒に筆箱を作る木工教室が開催されました。関アウトドアナイフ部会員の指導で、糸のこぎりや板をくり抜いたり、紙やすりで断面を磨いたり丁寧な作業を進めました。焼きごてなどで絵を描いてオリジナルの筆箱が完成。その出来栄えにとっても満足していました。

板取スイス村復活！

板取地域で子どもの自然体験事業「板取スイス村体験塾」が開かれ、旭ヶ丘小学校5・6年生児童が魚つかみやそば打ちなどの野外体験と農家宿泊体験をしました。かつてにぎわいを見せた「板取スイス村」を取り戻そうと地域の有志が立ち上がり、体験塾を設立。参加した児童らは、株杉の見学をはじめ、バーベキューをしながら水遊び、竹トンボづくりなど板取の大自然を満喫していました。



地図を囲んで「防災会議」

地域で発生する災害を想定し、地図への書き込みを通して、積極的に災害の対応策を考える災害図上訓練が武芸川老人福祉センターで開かれました。福祉関係者120人が班ごとに、危険箇所や避難所、高齢者世帯や介護が必要な人が住む家など、地域の特徴を確認。情報の集め方や要援護者の支援についても話し合いました。参加者からは、隣近所への声かけなど日ごろからの備えが大切という意見が出されました。

外国人児童の学習を支援

外国籍の子どもたちの放課後学習支援をする「つばさ教室」の夏休み講座がありました。講座は関市国際交流協会の主催で、市内6小学校を会場に3日間ずつ開かれ、5カ国の児童約30人が参加。市派遣の教育相談員や協会のアシスタントがサポートにあたり、かなや漢字、苦手な教科の復習をしました。修了式で、各児童へ修了証と記念品が手渡されました。



こぼれ話



今年もたくさん実施されている高校生の職場体験の中から、夏休みを利用して関有知高校2年の男子生徒3人が、ナイフ作家の原幸治さんのもとの実施したものと、関商工高校2年の女子生徒3人が、大杉にある「ふるさと農園・美の関」で実施した2つの取材にお邪魔しました。

まず共通して印象的だったのは、生徒の皆さんがそれぞれ一生懸命ナイフづくりや、種まきなどの農作業に黙々と取り組んでいる姿です。指導者の皆さんの熱

心な教えもあって、どちらも聞くことができたのは、モノを作ることや、植物を育てることの厳しさや大変さとともに、ナイフができていっていき喜びや、作物が育つことの喜びを実感できたという感想でした。

興味を持ったことを実際に体験できる職場体験学習は、生徒の皆さんが「将来の自分」を見つける1つの良い機会でもあり、受け入れる側の後継者育成にもつながります。

何かに一生懸命打ち込んでいる姿はいつ見ても良いものだなあと感じながら取材させていただきました。